

雑な現実を多角的に明らかにしている点が本書の良い点であろう。また、「差別」という視点ではなく、移民労働に関して論じる関係性の「分断」という概念で社会的な問題の質を明らかにしている点も注目に値する。本書が移民研究に資することは言うまでもなく、現在の湾岸アラブ諸国を理解するために非常に意義深い著作であるのみならず、地域間比較に基づくアジアの地域研究にも大きく貢献するものであろう。

本書からは、ディアスポラ・アフガニスタン人の研究をしている評者も非常に啓発されるところが多かった。アフガニスタンでは40年以上も続く戦乱のため、多くの人びとが国外に流出し、湾岸アラブ諸国でも約15万人のアフガニスタン人が労働している。また、他のイスラーム諸国に移住したアフガニスタン人もおり、彼らのネットワークがどのような実態を持っているのかについても、関心がもたれている。

地域研究は、それぞれの地域の実態を解明することに力を注ぐが、グローバル化時代の今日、それぞれの地域の出身者が世界に散らばって形成しているディアスポラ・コミュニティの実態解明も重要な研究テーマであろう。本書のような研究がさらに発展することを願っている。

(桐原 翠 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

菊田悠『ウズベキスタンの聖者崇敬——陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』風響社 2013年
396頁

ソビエト連邦が崩壊して今年で25年近くになる。かつて、ソ連時代ではソ連地域を対象とする人類学や宗教学などは非常に難しい研究であった。入国でさえ容易ではない西側の学者はもちろんのこと、ソ連内部の研究者も「宗教を阿片」と称し、民族主義をブルジョワ的なものと規定していたソ連公式イデオロギーの影響を受けざるを得なかったのである。その中で、イスラームもソ連内部では社会主義化によって徐々に消える前時代的後進性を示すものであったとされていたのであった。しかし、ペレストロイカの開始から現地の資料へのアクセスや現地調査が可能となって以降、旧ソ連圏に関する研究は格段に展望が開けてきた。こうした中旧ソ連圏を始めとして、東欧諸国やモンゴルなどを社会主義の経験を経た地域とみなし、伝統・社会主義・現代の三つの歴史的位相からその社会を分析していこうという「ポスト社会主義人類学」(p.29-37)¹⁾が成立していくのである。

本書は、そのような「ポスト社会主義人類学」と、イスラーム圏のある地域を研究対象とする「イスラーム地域研究」の双方からのアプローチを試みた著書である。ウズベキスタンの地方都市で陶業を有力な産業として持つリシトンをフィールドとし、1980年代に提唱され今なお欧米で支持されている「並行イスラーム論」²⁾に代わる新たな概念として「2つの原理と7つの核」を提示し、イスラームの儀礼の観察を通じたウズベキスタンの人々のイスラーム信仰実践の分析、ソビエトの近代化(社会主義経験)と人々の信仰との関係といった2つの点を通じてウズベキスタンのイスラームの実態を明らかにするのが本書の目的である。

本書は序章と終章を含む10章から構成されている。その内容を概観していきたい。

本書の目次は以下のとおりである。

序章(本書の射程/調査の経緯と論文の構成)

●第I部 フィールド紹介と分析の枠組み

1章 青い陶器の町リシトン

2章 ウズベキスタン・イスラームの分析枠組み

1) ポスト社会主義に関しては[佐々木2003;高倉・佐々木(編)2008]も詳しい。

2) [本書p.38] フランスの学者ベニグセンが1980年に発表した旧ソ連圏のイスラームをムスリム宗務局が頂点である政府公認のモスクとウラマー「公式イスラーム」とそれと並行して非公式に存在したスーフィズムなどを「並行イスラーム」に分けて考える分析概念。彼によれば、公認のイマームやモスクの数は少なく旧ソ連圏のイスラームへの影響力を乏しいものであり、宗務局に管理されていないスーフィズムを中心とした「並行イスラーム」こそがソ連イスラームの中心であったと言う。

●第II部 陶業とピール崇敬の変遷——ソ連時代を挟んで

3章 中央アジア手工業者におけるピール崇敬

4章 ソヴィエト時代のリシトン陶業とピール崇敬

5章 独立後のリシトン陶業とピール崇敬

6章 ピール崇敬の今日性——集団統制から個の表現へ

●第III部 仲介者のいるイスラーム信仰実践

7章 祈りあう生者と死者——ルーフ儀礼の比較考察

8章 ポスト・ソヴィエト時代のピール崇敬とイスラーム

終章（理論的考察／再イスラーム化の行方）

まず最初に、序章ではソビエト民族学、イスラームにおける聖者崇敬、近代化論と社会主義などの先行研究に関しての幅広い検討と調査地に入るまでの概要が記述されている。特に、前者の先行研究に関する検討によって、ソビエト近代化と聖者崇敬に関してはどのようなソ連近代化が聖者崇敬に影響を及ぼしているか、旧ソ連圏イスラームの分析枠組みに対しては「並行イスラーム論」の国家管理からの視点ではなく現地の人々からのボトムアップを目指すべきであるという問題提起を行っている。

それを受けた1章・2章では調査地リシトンおよび中央アジアの歴史的概要を纏め、たうえて「並行イスラーム論」に代わる新たな分析概念として「2つの原理と7つの核」（後述）を提唱している。著者はこの中でも先行研究が少ない職人の信仰実践に重要なピール（職種ごとの守護聖者）崇敬を重要なものとして取り上げることが明示している。これは、従来の先行研究が旧コルホーズ・ソフホーズといった農牧畜業を取り上げていたのに対して、ソ連における軽工業や手工業的な生産組織である陶業を取り上げることで、そこでのソビエト近代化の変化の特徴とピール崇敬の実態を明らかにしようとするものである。

3章・4章・5章・6章ではリシトンの陶器工とそのピール崇敬を題材として、ソビエト時代以前・ソビエト時代・現代までの社会的変化や聖者崇敬を概観・分析している。ソビエト時代を通じて陶器の製作方法やピール崇敬にも変化が起きたとしつつも、公的な場における宗教の分離や個人的な実証主義と合理主義の浸透を是とするソビエト的価値観とソビエト時代以前の伝統が結びついており、変容しつつもソビエト以前から現代まで脈々と歴史的な繋がりを持っていることを明らかにしている。

7・8章ではピール崇敬と同じく「見えない仲介者」が中心であり、中央アジアで広く見られる動物性油脂を使用した食事を一緒に取った後にクルアーンを読んで死者の平安を祈るというルーフ儀礼を取り上げている。ここでは中央アジアのカザフスタンとクルグズスタンを調査地とした同じポスト社会主義人類学の先行研究³⁾と比較を行い、その共通点としてルーフの語源がアラビア語のルーフ（靈魂）であること、現地でのルーフの発音がアルバック（クルグズスタン）・アルアク（カザフスタン）・アルヴォフ（ウズベキスタン）と似通っていること、食事の内容が動物の肉・脂を必要としていること、祈りの手順などの多くの点を見出しつつも、クルアーンと食事の意味づけが各地で異なることを指摘している。これを著者はイスラーム化の進展と現地の慣行の兼ね合いの問題としている。また、8章では再びピール崇敬も取り上げ、7章のルーフ儀礼と合わせ「見えない仲介者」としてのピールとルーフが中央アジアのイスラームにおいて重大な意味を持つことを明らかにしている。

終章ではこれまでの章で述べられてきたことを纏め、先に提唱したウズベキスタン・イスラームにおける「2つの原理と7つの核」が「並行イスラーム論」よりも現地の人々を分析する上では有用な概念であること、ソビエト的近代化と信仰実践との関係を分析した結果、この2つは対立するものではなく思想的近代化と信仰実践の持続が程度の差はあれど両立されていたと結論付けている。

このように本書を概観してきたが、以下について特に指摘したい。

まず第一に、本書でウズベキスタンのイスラームを捉える枠組みとして「公的イスラーム」対「並行イスラーム」、「イスラーム以前の宗教の残存」対「正統イスラーム」、「伝統イスラーム」対「原理主義イスラーム」

3) [藤本 2011] は北部カザフスタン農村及び南部の最大都市アルマティの事例。
[吉田 2004] は北部クルグズスタン農村の事例。

ム」といったようなといった二項対立的な学説を超えた「2つの原理と7つの核」を提唱したことである。これは従来の学説に見られた国家の管理や起源といった物を過大視しない、現地の信仰実態を分析するための最適の枠組みである。

「2つの原理と7つの核」は、まずウズベキスタンにおけるイスラームを宗教的な知識を重んじるイルム原理と生まれつきの血統や特別な力を重んじるアウリヨ原理の2つに分け、それに基づいてイルム原理の核を担うのがムッラ(男性の知識人)およびオティン(女性の知識人)、アウリヨ原理の核となるのが、目に見えるケースではイシャー(スーフィーの指導者)、ホジャ(いわゆるサイイド。現地では白い骨とも言う)、バフシ・キンナチ(精霊を使って治療などを行う人)、目に見えないケースではマザール・ボシ(聖者廟の主)、ピール(職種ごとの守護聖者)の計7つを設定するといった分析の枠組みである。従来の学説のような、国家の管理が及ぶか否かのみ主眼が置かれ官許のイスラーム以外を「並行イスラーム」だとか「日常イスラーム」といって単純化したのとは違い、複雑な信仰実態の枠組みを示すことに成功している。そもそも「並行イスラーム論」が現地調査に基づくものではなくロシア語文献資料の読み込みによるもののため現地の分析という点では限界がある一方で、この分析概念は文献資料も当然使用しながら人類学的手法を使いながら現地の有様をよく示しており、現地のイスラーム勢力がどのようなイスラームを目指してきたかという点を探るのに最適な概念なのである。もちろん著者の調査地であるリシトンを中心に考えられた枠組みであるため、ウズベキスタン全体に適用するには修正が必要ではあるが、ウズベキスタン以外の旧ソ連圏を対象とするイスラーム研究でも参照に値するほど現地のイスラーム勢力を体系だって描き出している。

第二に、近代化(特にソビエト的社会主義の経験)と信仰実践の関係である。

序章でカザフスタンやクルグズスタンのみならず、旧ソ連圏全体に見られるソビエト近代化は単なるロシア化や植民地化を意味するものではなく、現地の人々も積極的に受け入れて内在化してきたと示し、現代でもそれが基本的に引き継がれているとしていた。そして、ウズベキスタンもそのような現象が見られるとし、信仰実践も政教分離を基本としている傾向があるとする。もちろん、旧ソ連ムスリム地域ではソ連崩壊前後から多かれ少なかれイスラーム復興現象が進んでおり、ウズベキスタンもその例外ではない。しかしながら、この国ではイスラーム革命を目指すような急激な再イスラーム化は進んでこなかった。ゲルナーが言うところの「近代の諸矛盾を大伝統によって克服する」モデル[ゲルナー 1991]が通じなかった地域の1つなのである。当然、ウズベキスタン政府がイスラームの政治化を警戒し、実際に取り締まっていることもあるだろう。しかし、それだけでなくむしろ現地の人々が今なおイスラームを保持しつつも、同時にソビエト的価値観を自身の中に内在化し、政教分離を当然のものとして受けいれていること、すなわち、信仰実践の持続とソビエト時代に行われた近代化とが今なお両立しているとの前提としている。実際、ピール崇敬において人々がいう伝統とはソ連時代を指しているということや現代の人々がソ連時代の方が信仰を守っていたと嘆息し、ソ連時代を基準とする伝統を守ろうとしていることが明らかにされている。このようなウズベキスタンにおける「ソビエト的近代化の内在化」を実証的に明らかにしたことも本書の成果である。

しかし、本書にも以下のような問題点がある。

著者は全体を通して、「公式イスラーム」対「並行イスラーム」などの二分法では人々の信仰実態を分析することはできないと批判を加え、新たな概念まで提示している。しかしながら、その当の著者が二項対立的図式に陥っているのではないだろうか。著者は「2つの原理と7つの核」は必ずしも対立的概念ではないと言うものの、イルム原理とアウリヨ原理が互いに排除しあうような緊張関係にあるのは間違いなく、この議論は「並行イスラーム論」に見られた公式イスラームと並行イスラームの対立関係を反映しているとは思えない。それを考えると著者の言う「2つの原理と7つの核」は並行イスラームの中でさらに二分しているにすぎない。

また、いくら二項対立的な構図批判をしても、実際問題としてイスラームに関しては、政府やその影響を受けウズベキスタン全体のイスラームを公的に統括する宗務局の活動はあり、一定程度の影響力を現実を持っている。「2つの原理と7つの核」の分析概念では宗務局に対する位置づけは行われていない。著者の言うように単なる起源や制度を語るだけでは不十分であるならば宗務局の側も人々の間でどのような活動を行

い、どのような影響を持ってきたかを明確にしたうえでなければ、むしろ「並行イスラーム論」を発展させるだけに留まるのではないだろうか。

だが、これらの点を考慮しても、これまであまり明らかにされてこなかった旧ソ連の陶業の人々のイスラーム信仰実践を明らかにした点、「並行イスラーム論」に代わる新概念の提示、イスラーム信仰実践における「ソビエト的近代化の内在化」などを明らかにした点は、「イスラーム地域研究」としても「ポスト社会主義人類学」としても重要な貢献を果たしている。

また、序章における「イスラーム聖者崇敬」「近代化と世俗化」「旧社会主義圏における人類学」についての先行研究概観は、従来の学説から最新の研究動向までをコンパクトに纏めている。評者自身は旧ソ連圏のイスラーム特にザカフカース地域を専門としている立場から本書を大いに参考になると感じたが、評者のような旧ソ連圏研究者のみならず同じような社会主義化経験を持つ中東欧や中国、さらに他地域のイスラーム研究者にとっても示唆に富む内容を含んでおり、少しでも研究領域が重なるならぜひ本章とあわせて参照すべき内容ばかりである。

<参考文献>

- ゲルナー, E. 1991『イスラーム社会』（宮治美江子・堀内正樹・田中哲也訳）紀伊國屋書店。
- 佐々木史郎（編）2003『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究——民族誌記述と社会モデル構築のための方法的・比較論的考察』国立民族学博物館。
- 高倉浩樹・佐々木史郎（編）2008『ポスト社会主義人類学の射程』（国立民族学博物館調査報告 78）国立民族学博物館。
- 藤本透子 2011『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』風響社。
- 吉田世津子 2004『中央アジア農村の親族ネットワーク——クルグズスタン・経済移行の人類的研究』風響社。

（岩倉 洸 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Abbas Maleki, and John Tirman (eds.). 2014. *U.S.-Iran Misperceptions: A Dialogue*. New York and London: Bloomsbury, viii+171pp.

イランは、1979年のイラン・イスラーム革命によってイスラーム共和体制に転じて以後、中東地域においてきわめて重要な存在となっている。かつての中東地域はアラブ域内政治の支配力が強く、アラブ・非アラブの違いが域内関係にも強い影響を及ぼしていたが、イラン・イスラーム革命によって大きな変容が生じた。中東と国際社会の両者に対して、イスラーム政治の要素が導入されたのである。イランはシーア派的な色彩の強いイスラーム的紐帯を通じて、シリア、レバノンというアラブ国家、ヒズブッラー、ハマースといったアラブ地域のイスラーム運動との連帯を強めていき、イラクのシーア派との関係性も強化した。中東政治の様相を一変させ、今日でもいわばシーア派の盟主としてウンマにおけるリーダーシップを追求するその姿は、地域のみならず世界的にも大きな存在感を示している。

その一方で、この革命によって、それまで親密だったイラン・アメリカ関係は敵対関係へと転じた。親欧米の産油国として、またソ連の影響に対する防波堤として、革命前のイランはアメリカにとって戦略上非常に重要なパートナーであった。当然ながら、イランを失ったアメリカは中東政策の練り直しを余儀なくされた。その一環として、エジプト・イスラエルの和平を推し進め、エジプトを新たな戦略的パートナーとするとともに、イラン革命政権の転覆を望み、イラン・イラク戦争（1980～88年）ではイランに攻め込んだイラクのサッダーム・フサイン政権に肩入れした。革命以降のイラン・アメリカ関係が対立・緊張をはらみ、合理的に想定される双方の利益と必ずしも合致しないことは、よく知られている。

イラン・アメリカ関係を取り扱う上で念頭に置かなければならないのは、双方のミisperセプションや偏った視点の存在である。国家レベルのみならず、メディアや市民レベルでの誤った認識や偏見も根強い。私たちが目にする日常の報道においても、どちらかのパーセプションに寄った報道は多く、世論やメディ